



図 書 館 だ よ り

第 11 号 平成 19 年 2 月発行
弓削商船高等専門学校図書館

平成 18 年度作文コンクール優秀作・・・	1
平成 18 年度学生図書委員紹介・・・	1
寄稿「図書館利用の勧め」	
東嘉美 図書係長・・・	2
小特集 おすすめの一冊・・・	2
特集 図書館アンケート・・・	4
平成 17 年度図書利用状況・・・	6
編集後記・・・	6



校舎に隣接する松原海岸は環境庁の選ぶ「日本の快水浴場百選」にも選ばれ、夏は海水浴を楽しむ人で賑わいます。(写真提供・I 5・村上法子)

平成 18 年度作文コンクール優秀作

優 秀 作

S 1 原田祥平「私の部活」	S 3 野本貴弘「体験談」
M 1 山下祥輝「私の好きな事」	M 3 鹿野正治「僕の友人」
S 3 木村光生「アメリカ留学で経験したこと」	I 3 岡野悠太郎「私の勉強」

佳 作

S 1 黒住勇人「僕の日常生活」	I 3 浜原周平「私の将来へ」
M 1 大本俊介「わたしの私生活」	I 3 村上彩「思いやり」
M 1 田宮裕二「家族とのふれ合い」	I 4 藤川尚希「企業体験リポート」
M 1 村上裕樹「僕の生きる道」	I 4 宮本克史「夏休みの体験リポート」
I 1 露口和樹「ホラーな自分」	I 4 濱村祥太「体験リポート」
S 3 草加大司郎「特別な体験」	

平成 18 年度学生図書委員紹介

S 1 佐藤ひと枝	I 2 笹井愛実	M 4 福本聖
M 1 村上晴香	S 3 浅海聡一郎	I 4 澤田和也
I 1 齋藤類	M 3 鹿野正治	S 5 河田信治
S 2 井上敬裕	I 3 徳田麻矢	M 5 清水啓介
M 2 若月孝憲	S 4 藤本師光	I 5 藤本文代

図書館利用の勧め

図書係長 東 嘉美



学生の皆さん、図書館に来たことはありますか。

休憩時間に息抜き切って本を返しに来る人、放課後クラブ活動に出かける前に寄る人、昼休憩にマンガを読みに来る人、

息抜きや憩いを求めてくる人、どんな目的であっても図書館にとっては入館者として登録される大切なお客様です。

パソコンで検索してわからなければ、窓口に聞きに来てもらえばよいし、本の題名やら関係の本のあり場所を知らせるのは私たち図書館職員の仕事です。お目当ての本を取り出し、喜んでもらえるのはありがたいことです。

本校図書館には古今東西の本が7万冊ばかり眠っています。おおいに利用して欲しいものです。最近『バッテリー』を書いた小説家「あさのあつこ」さんの講演を聞く機会に恵まれました。彼女がいうには「本に出会うことは人と出会うことと同じこと」なのだそうです。1冊の本との出会いによって自分の運命が変わったと彼女はいます。そのことから人を感動させる本を書きたいと小説家になったのだそうです。

好きな本を好きなだけ借りられるのは、学生の特権です。社会人となるとますます忙しくなり、本との出会いが減るのではないのでしょうか。先日NHKのテレビ番組のクローズアップ現代でとりあげていましたが、現代の若者の国語力の低下は目をおおむねばかりなのだそうです。漢字を知らなくなったのはパソコンや携帯電話が普及したせいで、読み書きをしなくなったことが原因ではないかとリポーターは言っていました。ある企業の例なのですが、製造工場の注意書きで、「製品に差異が生じたときはただちに上司に報告すること」と壁に貼付していたのを、その新入社員は差異の意味がわからず放置して企業に多大な損害を与えたということです。その企業ではこれに懲りて勤務時間外に音読させたり、漢字検定をしたりして国語力を高める社内教育をしたとのことでした。

忙しくて本を読む暇がないというのは理由にならないと思います。時間というのは自分で作りだすものです。私は本を読めと強制する者ではないですが、感

性を磨くには読書がてっとりばやいです。人間の一生はわずかなものです。私は欲張りなものですからいろんな体験をしたかった。読書は様々な疑似体験ができます。現実には一人の国立高専機構の職員が合唱団員、森林インストラクター、売れない画家、観光ボランティアガイド、文化財研究会員、町内会役員、農業、親の介護とこなし、寝る前に読書をして、日記をつけます。なにか活性魚のような生活をしています。しかも齢60歳の老人が因島から通勤しながらです。

「人の将に死なんとするや、その言うや善し」といいます。どうか皆さん青春時代を無為徒勞に過ごすことなく、寸暇をみつけて読書にいきなり読んでください。本を読むことが人生の指針となり、血となり肉となることでしょう。

私は、今春定年となりますが皆さんお元気で。最後になりますが、弓削商船高専のますますの発展をお祈りいたします。お世話になりました。



小 特 集 おすすめの一冊

各科の教員から皆さんへ「おすすめの一冊」を紹介します。選りすぐりの本の数々、ちらりとでも興味がわいたら、ぜひ手にとってみてください。

エリザベス・ジャミソン・ホッジス著、真理由子訳『セレンディップの三人の王子』（バベル・プレス）

物語は「セレンディップティ」という言葉の語源となったおとぎ話である。セレンディップ王国の三人の王子は、ジャイヤ王から旅に出て魔法の詩を見つけにくるよう厳しい命令を受ける。王子たちは旅をする途中にさまざまな問題や物事にであう。が、勇気と知恵をもって取り組み、求めていなかったものをいつも偶然や賢明さによって見つけ出すのである。新しく価値あるものを生みだす創造における「セレンディップティ」とは、不断の探究活動と好運をもたらす超自然的な作用との偶然の出会いと解釈する。

（商船学科 石橋洋二先生）

後藤正治著『ラグビー・ロマン』（岩波新書）

ラグビーは走る格闘技である。同志社大学をラグビー界のトップに導き、多くの指導者を育てた岡仁詩という指導者の素晴らしい評伝である。人一倍ラグビー

について研究し、新しい戦術を考え出しているが、これを人に強いず、選手の納得がいくまで説明し、最後は学生たちに決定させる方法で指導している。この任せ続ける姿勢は、肝心の選手が自主性を持たなかったり、その意味をはき違えたりすると、チームは崩壊してしまうという指導者にとっては、最も忍耐を強いる指導法である。型にはめる方が目前の勝利に近づけると思われるが、選手を信頼すると、選手もそれに答えて人間的にも大きく成長すると信じ続けている。このような成長過程はラグビーだけでなく、他の競技にも十分通じるものがある。アマチュアスポーツの精神の原点であると思われる。人間の成長を考えるお勧めの本だと推薦します。(商船学科 多田勝先生)

山本周五郎著『季節のない街』(新潮社)

黒澤明監督の初カラー作品「どですかでん」の原作。巻末にある作家・開高健の解説を載せます。「季節のない街」は解説を必要とする作品ではありません。こころ減じる夜にゆっくりと読むべきものの一つですが、文章の背後のそれほど遠くない場所につつましくかくされたものを読みとる静かな眼、この世ののがさに多少なりとも訓練をうけたことのある人なら誰にでもわかる作品と思えます。

(商船学科 村上知弘先生)

東野圭吾著『変身』(講談社)

ごく平凡な青年に、世界初の脳移植手術が行われた。その青年におこるある変化とそれに伴う周囲の人々に及ぼされる影響を、ミステリータッチで描いた秀作。"自己"とはどういった条件によって成立するのかを、考えさせられる作品です。衝撃的な結末と最後の1文は、心に残ります。(電子機械工学科 中山恭秀先生)

きたみりゅうじ著『新卒はつらいよ』(幻冬舎)

前職がコンピュータプログラマという異色のライターによる就職活動と配属先でのさまざまな体験が独特のタッチで語られたコミックエッセイ。まったく専門外のコンピュータ業界に飛び込んだ蛮勇、希望に沿わない仕事に振り回される苦悩、先輩に恵まれて仕事を達成できたときの喜び、上司とのしがらみ、決断……。プログラミングコンテストの指導に長年関わっていて、「プロコン≒実社会でのシステム開発」と考えていた私にとって、もっといい加減で無責任で厳しい世界もあるんだということを再認識させてくれました。他の著作とも併せて、情報工学科の学生はもちろんですが、就職や仕事に関してどのようなスタンスで取り組むべきか悩んでいる学生に必読の一冊です。(情報工学科 長尾和彦先生)

水上浩一著『教わる技術』(ソフトバンクパブリッシング)

「教わる」のは、教官、先輩、友人、後輩、家族など様々です。「教わる」側が理解できなかった場合、「わかりにくかった」「何を言っているのかわからなかった」などとよく口にし、「教えた」側を一方向的に非難するのをよく見かけませんか? 「教える」と「教わる」は、互いが協調して行う作業だと思います。今まで、前述のようなことを口にしたことがある方は、この本を読んで「教わる技術」を身に付け、より良い人生が送れるように役に立ててもらいたいと思います。(情報工学科 峯脇さやか先生)

ボブ・ウッドワード著、伏見威蕃訳『ディープ・スロート 大統領を葬った男』(文藝春秋)

ワシントンのウォーターゲートビル of the 民主党本部への不法侵入事件から三ヶ月後、1972年10月、この事件はニクソン再選のためにホワイトハウスとニクソン大統領再選委員会が行った政治スパイ・妨害工作の一環であると、ワシントンポスト紙が報じた。記事の情報源について同紙記者ボブ・ウッドワードは、本人が死ぬまでその名を明かさなかつもりであったが、本人が自ら名乗り出たために一連の事実を書いた本書が世に出た。

最近のテロ対策を理由としたマスコミの情報源秘匿を安易に制限しようとする動きに一石を投じる書ではないかと思われる。(総合教育科 山尾徳雄先生)

池井戸潤著『空飛ぶタイヤ』(実業之日本社)

雪印乳業をはじめ、大企業による"モラル・ハザード"。この作品は、三菱自動車のリコール隠しを題材にしている。欠陥部品をメーカーの全責任で回収、修理交換するのは当然の義務である。しかし、修理コストだけが優先されはじめると、企業倫理は地に落ち、ユーザーを無視した隠蔽工作が確信犯的に行われていく。その結果、すべてが白日の下にさらされたとき、メーカーの信用は大きく失われてしまう。

リコール隠しによって死亡事故まで起こり、被害者であるはずのユーザーが加害者扱いされる。許されないことである。この作者は銀行小説を多く書いてきたが、大きな組織の中でもおしつぶされまいとする「俠気」を持ち続ける人々を描いてきた。本書では417ページをぜひ御覧あれ。(総合教育科 神谷正彦先生)

池谷裕二・糸井重里著『海馬—脳は疲れない』(新潮文庫)

「自分はある時は利口なんだけど、別のある時はバカになっていると思う」…確かにそうなんだよなあ。皆さんも感じたことはないでしょうか? このような

脳に関する素朴な疑問を、糸井さん一流の切り口で質問としてぶつけ、それに脳科学者の池谷さんが科学者の観点から答えていくという対談をまとめたのが本書です。「脳は、見たいものしか見ない」とか「脳は、わからないことがあるとウソをつく」とか、興味をそそられる話題が次から次へと出てきて、「へー、そうだったのか!」と驚くこと請け合い。脳の不思議さを手軽に実感出来る実験も随所にあって飽きさせません（個人的には盲点の実験がおすすめです）。ただ、副題にある「脳は疲れない」という表現は誤解を招く

かもしれませんね。とはいえ、自分の脳の性質を易しい言葉で教えてくれるだけでなく、それらを通じて生きる勇気までも与えてくれるという点で、他の脳に関する本とは一線を画します。そうそう、本書によれば「ウソをつくのが人間の本性」なのだそうです。私がウソをついていなければいいのですが。

（総合教育科 岩本豊先生）

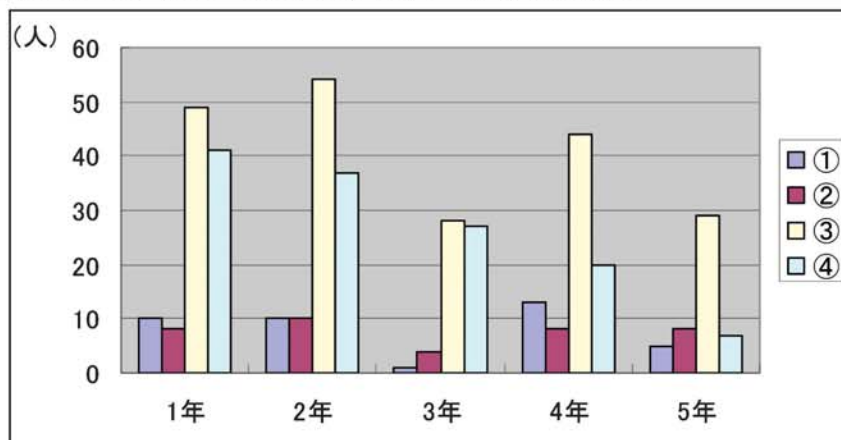


特集 図書館アンケート

本校の図書館は一般教養図書、専門図書など約 70000 冊を所蔵するほか、数多くの雑誌や文庫本を備え、勉学や研究支援ならびにリフレッシュなどの場を提供しています。平成 18 年 10 月に全学生（商船学科 5 年生と専攻科生は除く）を対象に、皆さんがどのようなかたちで図書館を利用しているか、また図書館に対してどのような要望などを持っているかアンケート調査を行いました。その結果、414 人から回答がありました。ここにはその調査結果の主なものをご紹介します。

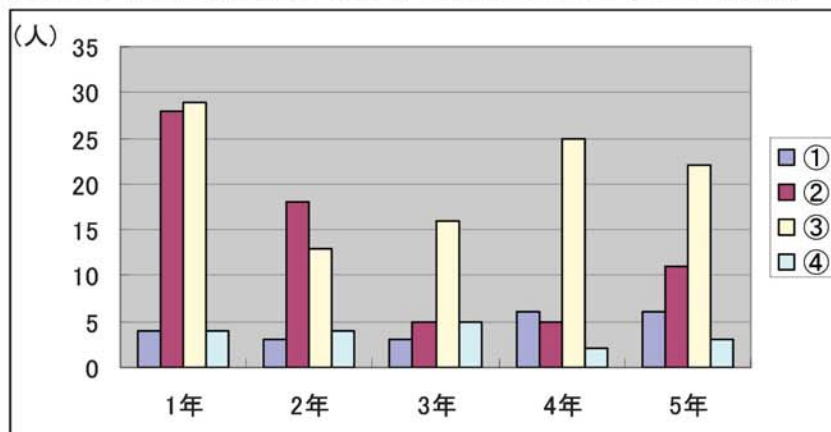
1. 今学期、図書館に月平均何回入館しましたか。

①月平均 10 回以上、②月平均 5～9 回、③月平均 1～4 回、④全くない



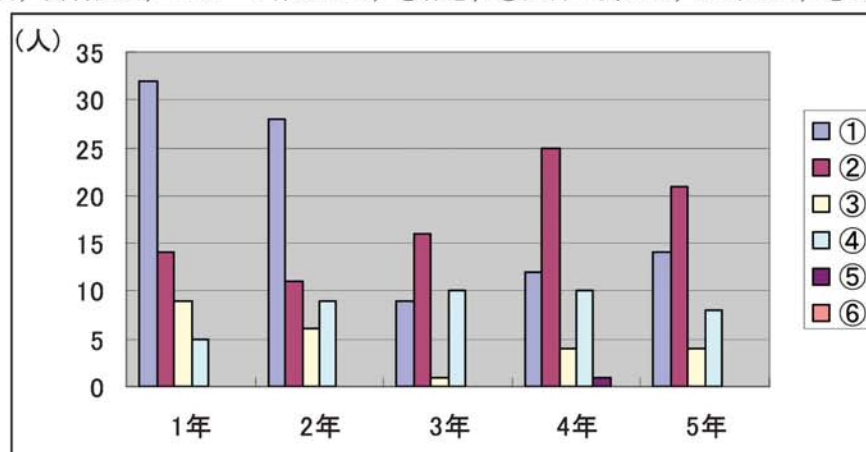
2. 入館する時間帯で多いものを教えてください。

①授業の合間、②昼休み、③放課後(17時から19時の時間外を含む)、④土日の開館時



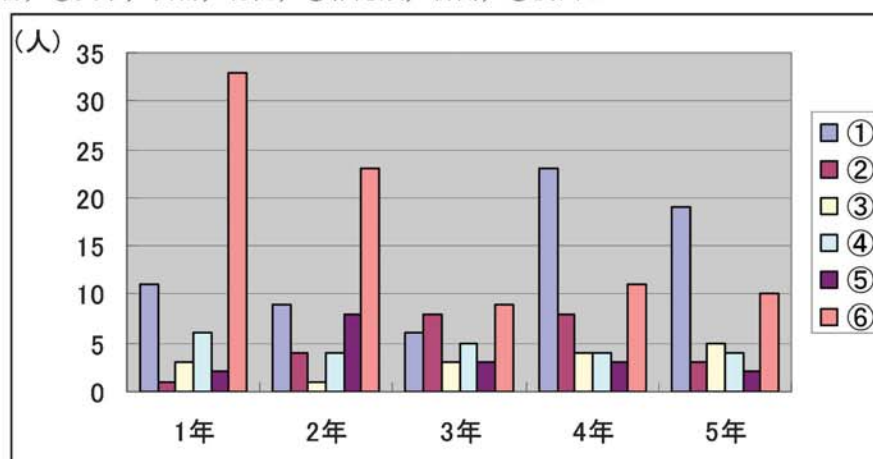
3. 入館の目的、利用の仕方について教えてください。

①読書, ②学習, 資料調査, レポート作成など, ③休息, ④図書の貸出し, 返却など, ⑤映画鑑賞, ⑥その他



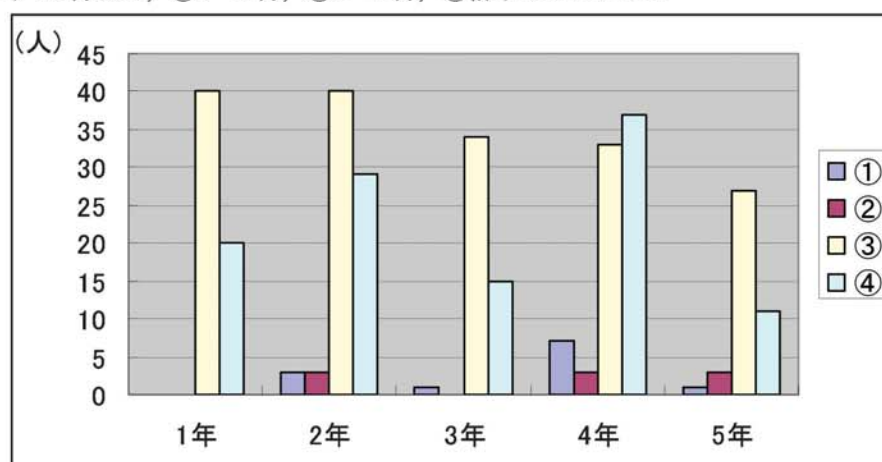
4. 図書館でよく利用するものは何ですか。

①教科に関する参考書, 便覧, 資料など, ②資格試験に関する参考書類, ③工学, 自然科学, 社会科学に関する専門書, ④文学, 芸術, 総記, ⑤雑誌類, 新聞, ⑥漫画など



5. 今学期, 図書館の本を月あたり何冊借りましたか。

①一月あたり 10 冊以上, ②5~9 冊, ③1~4 冊, ④借りたことがない



図書館に対する要望などでは、図書の充実に関するもの（漫画希望が多かった。）やエアコンを入れて欲しいといった設備の改善などに関する多くの意見が寄せられました。図書館としては今回の調査結果も参考にしながら、今後とも活用度が高く、便利で快適な図書館を目指して改善や充実を図って行きます。アンケートにご協力有難うございました。



ここです。

留学生コーナーを新設

昨年「専攻科コーナー」の横に「留学生コーナー」が新設されました。日本の風土や文化を外国語で紹介したものや日本語で書かれたインドネシア語やフィリピン語の本、漢字なりたち辞典など興味深い本が目白押しです。是非一度手に取ってみてください。



図書館利用状況

(平成17年度)

※ 網がけ 内は時間外利用

(1) 入館者数

事 項	合 計
学 生(人)	16319 2572
教職員(人)	1667 102
学外者(人)	224 122
計 (人)	18210 2796
開館日数(人)	244 249
1日平均(人)	75.2 10.9

(2) 館外個人貸出者数

事 項	合 計
学 生(人)	1802 249
教職員(人)	230 5
学外者(人)	42 8
合 計(人)	2074 262

(2) 館外個人貸出冊数

事 項	合 計
学 生(冊)	2866 435
教職員(冊)	681 14
学外者(冊)	145 27
合 計(冊)	3692 476

(4) 図書貸出状況 (分類別)

分類別	000 総 記	100 哲 学	200 歴 史	300 社会科学	400 自然科学	500 工学技術	600 産 業	700 芸 術	800 語 学	900 文 学	その他	合計	貸出日数	1日平均 貸出冊数
合 計	157 14	23 2	56 3	186 32	196 47	1454 226	38 2	52 6	161 8	1355 149	1 0	3692 476	244 249	15.1 1.9
百分率 (%)	4.3% 2.9%	0.6% 0.4%	1.5% 0.6%	5.1% 6.6%	5.3% 9.6%	39.5% 46.2%	1.1% 0.4%	1.4% 1.2%	4.4% 1.6%	36.8% 30.5%	0.0% 0.0%	100% 100%	・・・ ・・・	・・・ ・・・

— 編 集 後 記 —

図書館だより第11号をお届けします。「特集 図書館アンケート」「小特集 おすすめの一冊」はいかかでしたか。図書館から足が遠のいている人も、この機会に一度立ち寄ってみてはどうでしょうか。本の読み方に、ルールはありません。気になった本を手に取り、好きなペースで好きな姿勢で読み、面白くなければ次の本に手をのばせばいいのです。その時にピンと来なくても、時間が経って面白く読める日が来るかもしれません。

読書量によって人間の価値が決まるわけでもありません。ただ、物事を説明する時、語るための言葉を持っていないければ、相手に理解してもらえないということが起こります。心を伝えるための表現が、知らず知らずのうちに増えていくのも、読書の効用だと思われます。

目まぐるしく変化する時代の中で、図書館の位置付けや果たす役割も変わりつつあるのかもしれませんが、しかし、学校の歴史とともにたくわえられた膨大な蔵書は、数を増やししながら、今後も変わらずに皆さんのそばに在ります。「皆さんにとって、図書館とはどういう場であれば良いのか」。この問いを、図書館は持ち続けています。利用する皆さんあつての図書館ですから、要望・意見など、どうぞ遠慮することなくお聞かせください。